

# 横山城跡発掘調査報告

1984

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

## 目 次

I はじめに	(1)
II 位置と環境	(2)
III 調査の概要	(6)
(1) 調査の概要	
(2) 遺 構	
(3) 遺 物	
IV まとめ	(18)

## 例 言

1. 本書は広島市安佐北区高陽町における自動車学校造成工事に伴い昭和58(1983)年6月から8月にかけて実施した横山城跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は有限会社アサヒ自動車学校から委託を受けた財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 本書の執筆・編集ならびに出土遺物の整理・実測・製図・写真撮影については辻 満久がこれを行った。
4. 出土遺物の縮尺は原則として次の通りである。土器片、土製品及び金属器・石器片。
5. 本書では方位は磁北を記入している。なお真北はこの付近では磁北に対して6°40'東にふれる。
6. 本書に掲載した第1図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図(海田市)を使用した。

## 挿 図 目 次

第1図	横山城跡周辺山城跡分布図 (1:50,000) .....	3
第2図	横山城跡周辺地形図 (1:5,000) .....	4
第3図	横山城跡地形測量図 (1:1,000) .....	(折込)
第4図	第1郭断面図 (1:80) .....	8
第5図	第1郭・郭変遷図(その1) (1:200) .....	10
第6図	第1郭・郭変遷図(その2) (1:200) .....	11
第7図	石垣実測図 (1:30) .....	12
第8図	礎石建物跡実測図 (1:60) .....	12
第9図	出土土器・陶磁器実測図 (1:3) .....	14
第10図	出土土鏝実測図 (1:2) .....	15
第11図	出土鉄釘実測図 (1:2) .....	16
第12図	古銭拓影 (1:1) .....	17
第13図	石製品・金具類実測図 (1:2) .....	17

## 図 版 目 次

図版1	横山城跡全景
図版2 a	横山城跡調査前遺景
b	同上調査後遺景
図版3 a	横山城跡第1郭・第2郭・第3郭・第5郭近景
b	同上第1郭より南西尾根上の郭を望む
図版4 a	横山城跡第1郭石垣
b	同上礎石建物跡
図版5 a	横山城跡第1郭断面
b	同上第4郭を望む
図版6 a	横山城跡第2郭完掘状況
b	同上第2郭・第3郭調査風景
図版7 a	横山城跡第2郭・第3郭鞍部
b	同上第3郭完掘状況
図版8 a	横山城跡第4郭完掘状況
b	同上第5郭完掘状況
図版9	横山城跡出土遺物(その1)
図版10	横山城跡出土遺物(その2)

## I はじめに

昭和57(1982)年5月、有限会社アサヒ自動車学校(以下アサヒ自動車)から、広島市郊外の安佐北区高陽町上深川の庄原地区に自動車学校を建設する計画が広島市に提出された。この計画は、昭和58年度の早い時期に工事に着手し、年度内に開校しようとするもので、広島市教育委員会(以下市教委)ではこれを受けて、当該地には横山城跡が存在することから現状で保存をはかる旨の協議が行われた。しかし、城跡のある丘陵の一部を削平しないと用地内への道が確保できないこと及び丘陵の裾を削平しないと用地が狭くなることから、道幅のない丘陵斜面については建設用地として削平はやむを得ないが、郭が存在する丘陵上は現状で残すことで設計変更を進めることになった。

その後、城跡が立地する丘陵は急峻で、地山の風化が進んでいることもあって、計画に従って丘陵斜面を削平すると、傾斜角度が強くなり災害を生ずる恐れがある旨の指導が市都市整備局宅地開発指導課からあった。このため、翌年1月及び2月に、市教委とアサヒ自動車は設計変更を含めて度々協議を重ねた。この結果、(1)本城跡を事前に発掘調査することはやむを得ない。(2)市教委はすでに昭和58年度の事業計画を決めており、昭和58年度に調査はできない。(3)調査員が確保できれば調査団を編成して調査を行ってもよいという方針が出された。

このため、アサヒ自動車では、昭和58年度に調査を行うため、調査団の編成をはかることになった。しかし、調査員を確保することができないため調査団の編成は不可能であった。4月になり、アサヒ自動車から県教育委員会及び財団法人広島県埋蔵文化財調査センター(以下調査センター)に調査についての協議があった。当調査センターとしては、昭和58年度事業はすでに実施していることから、新たに横山城跡の発掘調査を行うには、事業計画の変更、調査時期の調整が必要であった。その後、県教育委員会と協議を重ねるとともに事業の見直しを行った結果、発掘調査を行うことが可能となったため受託することになった。なお、調査にあたっては、立木の伐採、安全対策、地形測量、作業員の確保が必要なため、準備期間をとって6月から調査に入ることになったが、立木の伐採が遅れたこと、雨期に入ったことなど結局6月20日から8月12日までの約2ヶ月間実施した。

調査にあたっては、広島県教育委員会、広島市教育委員会、アサヒ自動車、広島大学理学部地質鉱物学教室の柴田喜太郎氏をはじめとして、地元の方々から多大な協力を受けた。末筆ながら記して謝意を表したい。

## Ⅱ 位置と環境

横山城跡は、広島市安住北区高陽町上深川字赤石125甲127及び131番地に所在する。

高陽町は市の中心地から近く、交通至便なこともあって、近年宅地化が急速に進んでいる。これに伴って多くの遺跡が調査され資料が増加しているが、上深川地区は平野部からやや奥に入り、沖積地が狭く、山裾が急に立上っているなど開発しにくい条件のため宅地化はやや遅れている。しかし本城跡の南方約3kmの安芸町福田には山陽自動車道安芸インターチェンジが予定されているなど開発は早晚当地にも及ぶものとみられる。

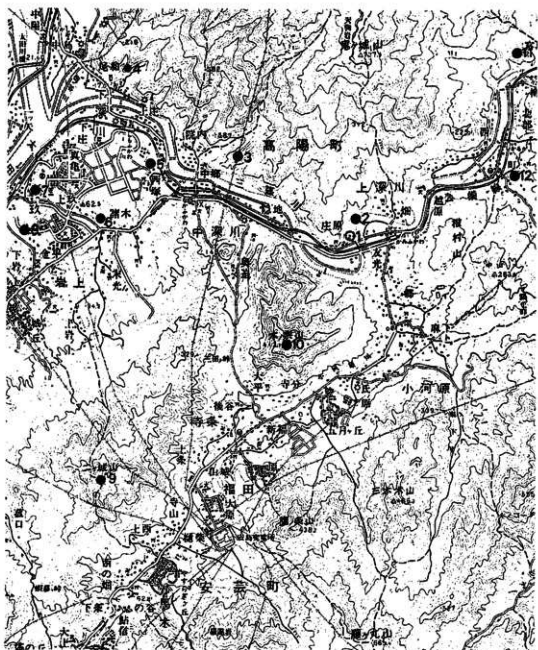
さて、本城跡の直下を流れる三篠川は、高陽町の東北に位置する白木町の中央部を蛇行しながら狭い沖積地を形成しつつ西南流し、本城の南方で北流してきた小河原川を併せてやや広い沖積地をつくり、西方に流れを転じて約4km下流で太田川と合流している。この三篠川下流域の地は中世に深川郷と呼ばれていたようで、数kmごとに山城が点在している。これらの山城には文献に記述がありながら所在が不明なものやすでに消滅したものもあるが、近年、発掘調査や分布調査により次第にその実態が知られつつある。なかでも高陽ニュータウンの開発に伴う亀崎城跡、諸木城跡、恵下山城跡、地藏堂山城跡の発掘調査や市内の山城の分布確認調査は、当地の中世史の解明はもとより、県内の山城のあり方を研究するうえで注目された。

さて、横山城跡周辺の山城を概観すると、

七曲城跡 横山城跡背後の標高93.8mの丘陵上に位置し、25×8mの長方形を呈する本丸を中心に、北に1m下って長さ23m、幅南側で6m、北側で15mの台形の郭があり、この郭の東斜面には石垣を積んだ部分がある。この郭の北には1m高く18×9mの長方形を呈する郭を設けている。その北は丘陵が鞍部となる地形を利用して3本の堀切があるが、一番南側のものが幅が広く、西側は分岐して堅堀を1本設けている。本丸から南には1m下って11×6mの小郭があり、その南には堀切を設けている。なお東側斜面には50×2mの帯状の細長い郭を3段設けており、堀切の南には尾根上に4段の小郭がある。この城の城主名は伝承がない。城の立地からすると本城跡と横山城跡は、次に述べる院内城のように本城と支城の関係にあるのではないかと推定される。

院内城跡 標高164mの丘陵上に位置する。中央の郭を本丸とし、東には約3m下って半円形の郭を設け、この郭に隣接して2本の堅堀がある。本丸の西には半円形の小郭がある。なおこの郭の西にある鉄塔の場所も郭であったとみられる。ここから尾根を約100m下った標高約107m付近に郭を1ヶ所設け、さらに約60mほど下って標高90m付近に大小の郭を7段設けているが、本城と支城の関係にあるとみられる。城主として牛尾遠江守幸清の名がみえる。

尾和城跡 太田川と根谷川、三篠川が合流する場所を臨む標高78m付近の細尾根に階段式に郭を配置した城跡で、背後と前面に堀切を設けている。なお丘陵先端の尾和神社付近は平坦地となっており郭としていた可能性がある。城主として尾和左衛門の名がある。

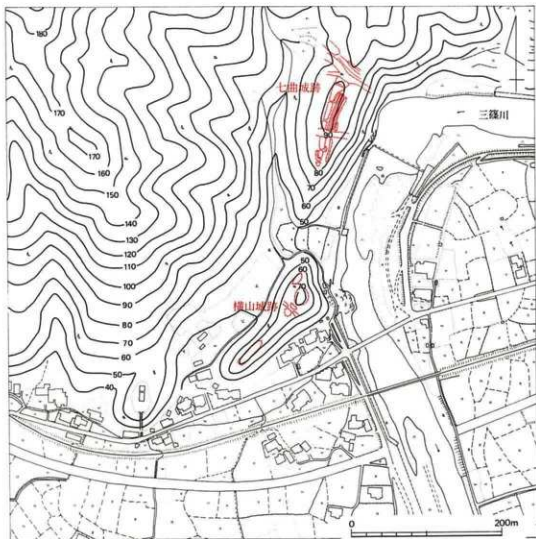


第1図 横山城跡周辺山城跡分布図 S=1:50,000

1. 横山城跡
2. 七曲城跡
3. 院内城跡
4. 尾和城跡
5. 亀崎城跡
6. 羅木城跡
7. 恵下山城跡
8. 地蔵堂山城跡
9. ニヶ城山城跡
10. 木宗山城跡
11. 五菴城跡
12. 琴平城跡

**亀崎城跡** 標高約84mの丘陵上に位置している。本丸に相当する第1郭を中心に郭を7段配置しており、斜面には堅堀7本を各方向に配置し、堀切は尾根が続く西南側と北側の2ヶ所設けている。なお本丸は2回修築している。また丘陵の先端で亀崎神社が位置する場所も城の一部と推定されている。出土遺物として瀬戸焼、備前焼、常滑焼、中国製白磁及び青磁、硯、砥石、石鍋、土錘、鉄釘、鉄鎌、鋤、止金具などがある。時期は戦国時代とされている。城主には井尻又兵衛和重の名がある。

**諸木城跡** 標高約74mの丘陵上に位置する。本丸に相当する第1郭から南に第2、3郭を階段式に設け、第1郭の東には第4郭がある。なお第2、3郭の東下の比高差4～5mのところには帯状の郭があり第4郭に続いている。また第1郭には建物跡、第2郭の東側には土塁を兼



第2図 横山城跡周辺地形図 S=1:5,000

わた通路が第1郭に上っている。城主についての伝承はない。

**恵下山城跡** 太田川の左岸の標高約70mの丘陵上に位置する。対岸には香川氏の居城である八木城がある。本丸に相当する第1郭から南西に階段状に3つの郭を設け、第1郭の側面には帯状の郭がある。また東隅りに延びる丘陵上にも郭群がある。なお第1郭には建物8棟分、櫓列、通路、石垣などが確認されている。出土遺物には備前焼、常滑焼、瀬戸焼、中国製白磁及び青磁、高麗青磁、土師質土器、須恵質土器、鉄釘、スラグ、埴場などがある。時期は鎌倉時代後半頃から室町時代中期頃と推定される。城主として金子三郎次郎入道頼西の名がある。

**地蔵堂山城跡** 標高約56mの丘陵上に位置して、本丸に相当する第1郭を高所に配置して階段式に郭を配置している。本丸の南に小郭があり、この郭と第1郭の下に帯郭がめぐり、二の丸に相当する郭には土橋の遺構をもつ遺構がある。三の丸に相当する郭の西には馬蹄状を呈する登り口の施設があり、この先端にさらに郭を設けている。出土遺物には備前焼、瀬戸焼、土師質土器、中国製白磁及び青磁、土師、鉄釘などがある。時期は戦国時代で、城主の久村玄蕃允繁安は天文15年(1546)に太田川対岸の八木城主香川光景と争って敗れた。

**二ヶ城山城跡** 標高483mの山頂に位置し、別名豆が城ともいうが、詳細は不明である。

**本ノ宗山城跡** 標高約413mの山頂及び東西に延びる尾根線上に位置し3群からなる。山頂部の郭群は堀切によって東側の郭と西側の郭に分れ、西端の最高所にある郭には一部に石垣があり、東端の郭には土塁がある。東方の郭群は飛石状に郭を配置し、西端の郭には両側に堀切があり、東端の郭には土塁がある。また西方の郭群は3ヶ所に小郭を配置している。城主として奥西仲綱、吉川興経の名がみられる。

**五竜城跡** 標高173mの丘陵上に位置し、丘陵頂部の本丸を中心に、その南に3段の小郭を設け、本丸の東には堀切がある。本丸から西北に下った所に堀切と郭を設けて本丸背後の防御としている。城主は不明である。

**零平山城跡** 標高約101mの丘陵上に位置し、本丸に相当する第1郭から南に2つの郭を階段式に配置し、この東側にも小郭がある。また本丸から東に下った場所にも大きな郭があり、その東には堀切がある。なお本丸の北側を約10m下った所にも小郭が2段あり、丘陵先端の水田からの比高約1mの平坦地や順正寺の付近も郭あるいは土塁地であった可能性がある。

以上の城跡のほか、広島藩が編纂した「芸藩通志」によると、当地域には相原城跡、片山城跡、松尾城跡などのほか七曲城跡や院内城跡の北に聳える標高737mの山を鬼ヶ城山といい、本ノ宗山から北に延びる尾根の一つは藤ヶ丸と呼ばれているなど「城」・「丸」の名があり、城跡の可能性も考えられるが、これらの詳細は不明である。

註1 広島県教育委員会『高尾新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』昭和52(1977)年

註2 広島市教育委員会『山城』広島市の文化財第20集 昭和57(1982)年



### Ⅲ 調査の概要

#### (1) 調査の経過

本城跡は比較的簡単な構造の階段式山城跡である。標高737.3mの鬼ヶ城山から南に派生した尾根上に位置し標高71.2m・比高差34mを測る。西流する三篠川が南に蛇行する地点にあたり、この川が天然の濠を成している。なお北側には谷を挟んで七曲城跡がある。

発掘調査は尾根上の郭（1番高所の郭を第1郭とし以下南西に延びる尾根上に第1郭から近い順に第2郭から第4郭とした）及び第1郭の北側の郭（第5郭）を全面発掘した。総発掘面積は約1,500㎡であった。土捨て場の確保と作業の安全を期すため第5郭から発掘調査を開始し、次に第2郭を行い、第1郭と第3郭・第4郭の発掘作業を適宜並行して行った。調査の結果、第1郭では少なくとも3回にわたる郭の拡張・増改築を確認し、石垣・礎石建物跡及び土師質土器・土鏝等の遺物を検出した。第2郭から第5郭は10～20cmの現表土層を掘ると直ぐ粘板岩質の岩盤が露頭し、遺物等は皆無であった。

#### (2) 遺構

##### 第1郭

23×11.5mの楕円形の郭で標高71.2m・三篠川との比高差34mを測る。この郭は少なくとも4時期に分けて面的に捉えることが可能であり、構築した順序に第1期から第4期とすることにした。

##### 層序（第4図）

調査にあたってはまず十字に小トレンチを入れ、この層位的観察・検討を行った結果、少なくとも3回にわたる増改築が行われたことが明らかとなった。このため、構築にかかわる層序についてまずみると、

1（第1層） 表土層である。中央部は所々で地山が露出している。

3c（第2層） 赤褐色角礫土層。この最上面が第4期面を形成する。

4a（第3層） 暗褐色粘質土層。角礫・多量の炭化物を含む。

以上、3c（第2層）と4a（第3層）が3回目の盛土である。

6c（第4層） 淡黄褐色角礫土層。天目茶壺や鉄釘等が出土した。この層の最上面が第3期面である。この面で1間×2間の礎石建物跡を検出した。

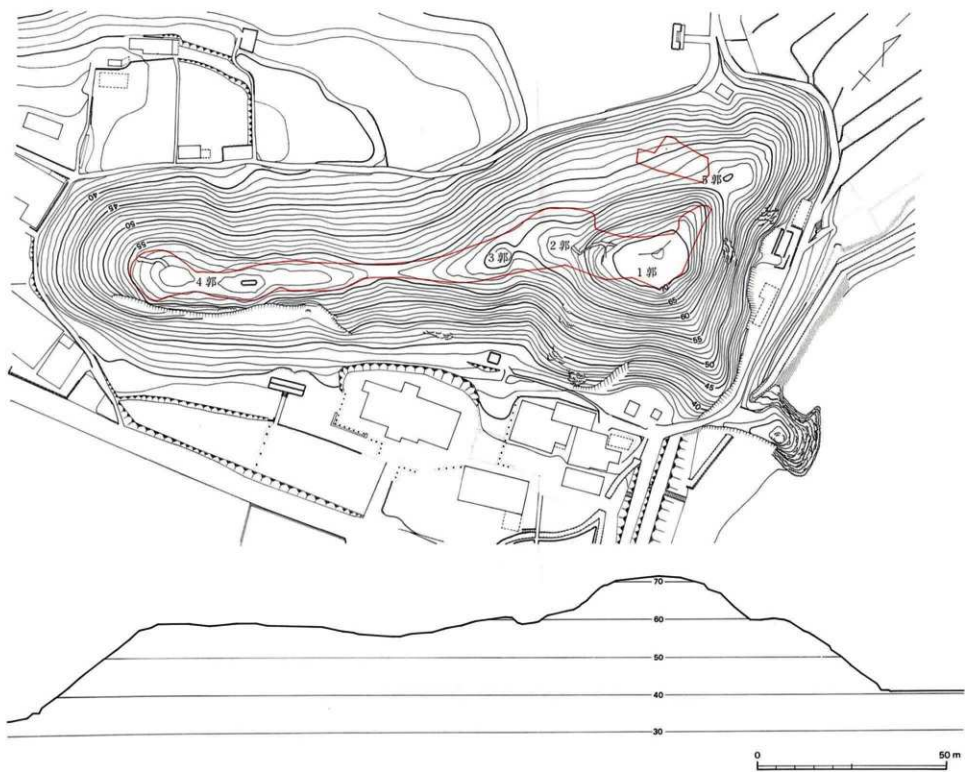
3（第5層） 赤褐色土層。炭化物を多量に含む。

2（第6層） 茶褐色土層。角礫が少量混入している。

5（第7層） 黒褐色土層。

7a（第8層） 暗黄褐色粘質土層。

4b（第9層） 暗褐色砂質土層。角礫が少量混入している。



第3図 横山城跡地形測量図 S=1:1,000

8a (第10層) 暗灰褐色粘質土層。層厚は8cm。

7c (第11層) 暗黄褐色角礫土層。

7d (第12層) 暗黄褐色礫層。基本的には7c (第11層) と同じ。角礫がより密集している。

1a (第13層) 暗茶褐色粘質土層。層厚24cmを測る。

以上、6c (第4層) から1a (第12層) が2回目の盛土である。この時期は他の時期に比べて、かなりの土量を盛っており、もっとも厚い部分で80cmを測る。

8a (第14層) 暗灰褐色粘質土層。炭化物を多量に含む。この最上面で石垣を検出した。

6 (第15層) 淡黄褐色土層。炭化物が若干混じる。

7 (第16層) 暗黄褐色土層。角礫が多量に混入する。

5 (第17層) 黒褐色土層。炭化物を少量含む。

6b (第18層) 淡黄褐色砂質土層。

7c (第19層) 暗黄褐色角礫土層。炭化物が多量に混じる。この層の最下面が第1期の構築面にあたる。すなわち地山削平面となっている。

以上、8a (第13層) から7 (第15層) の最上面が各々部分的に補充しつつ、第2期面を成している。8a (第13層) から7c (第18層) が1回目の盛土である。

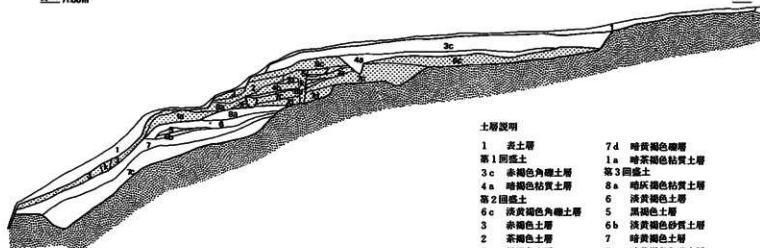
遺物は各期の面のやや下からの出土や若干上からの出土で、面の直上のものは僅かであった。また各期の面は共通して炭化物が拡がっていた。これらの特徴をもつ角礫土として分層したc層または粘質土層として分層したa層のうち角礫の混入の多い層の場合も最上面を面的な拡がりをもつと推定できる場合、この面を各時期に使用していた面と考えた。

#### 郭の変遷過程 (第5図・第6図)

第1期 中央部に長軸16m×短軸12mの楕円状の平坦部があり、この平坦部は南西から南東にかけて弧状の段を削出している。なお、南東側は1m前後の僅かな平坦部を造ってさらに1段落ちて平坦部を削り出す。南西側では中央平坦部から4～5m離れて比高差2.5m、8×1.4mの帯状の平坦部がある。また北側には3m前後離れて比高差2.25m、平面規模1×4mの帯状平坦部がある。これら3つの平坦部は全期を通じて多少の規模変更を伴うものの普遍的な構成部分となっている。このことから、第1郭が3つの平坦部から成り立っており、相互補完的な機能を有していたと推定できよう。

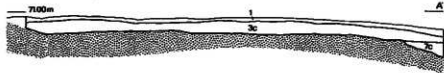
第2期 この期の構造上の大きな特徴として、中央平坦部(18×12m)の南西側への拡張があり、第1期の弧状の段の南西側約2.5m離れて新たな段を設けている。次に南西平坦部は第1期のものを完全に埋めて新しい平坦部(8×1.7m)をつくっている。またこれと並行するように北側平坦部も新に盛土・拡張(3×4m)をして、これら両翼の平坦部と中央部との比高差・距離も縮めている。第1期に比べると平坦部の相関性を増すと同時に石垣(第7図・図版4a)を南西平坦部と中央平坦部斜面の境にめぐらしている。石垣は一辺20cm前後の角礫をやや雑に築いたもので、長さ2.5m、幅80cm、高さ40cmを測る。構築法は粗いが、石と石の間に充填し

A 7100m

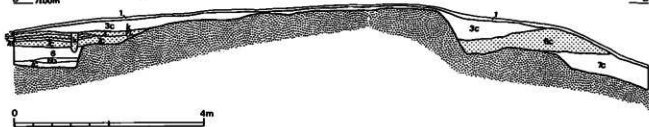


土層説明

- |       |          |       |                   |
|-------|----------|-------|-------------------|
| 1     | 表土層      | 7d    | 暗黄褐色礫層            |
| 第1回盛土 |          | 1a    | 暗茶褐色粘質土層          |
| 3c    | 赤褐色角礫土層  | 第3回盛土 |                   |
| 4a    | 暗褐色粘質土層  | 8a    | 暗灰褐色粘質土層          |
| 第2回盛土 |          | 6     | 淡黄褐色土層            |
| 6c    | 淡黄褐色角礫土層 | 5     | 黒褐色土層             |
| 3     | 赤褐色土層    | 6b    | 淡黄褐色砂質土層          |
| 2     | 茶褐色土層    | 7     | 暗黄褐色土層            |
| 5     | 黒褐色土層    | 7c    | 暗黄褐色角礫土層          |
| 7a    | 暗黄褐色粘質土層 | k     | 攪乱層               |
| 4b    | 暗褐色砂質土層  |       | (数字は土層の色調、アルファベット |
| 8a    | 暗灰褐色粘質土層 |       | 記号は土層の性質を表す。)     |
| 7c    | 暗黄褐色角礫土層 |       |                   |



B 7100m



第4図 第1回断面図 S=1:80 (7ヶ目から第2回盛土)

た土で強化している。本来は北西の方向にも巡っていたようである。

第3期 中央平坦部の南西方向・北方向への拡張は継続して行われ、平坦部は19×15mの楕円形を呈する。なお南東にあった2つの段のうち1段埋めて平坦にしている。南西側平坦部(8×2.5m)、北側平坦部(2.5×4m)と中央平坦部との比高差、距離、規模は前期とほぼ同じである。中央平坦部の南隅近くで1間(1.7m)×2間(3.4m)の礎石建物跡(第8図・図版4b)を検出した。礎石は一辺20~30cmの角礫を使用し、長軸方向はN-69°50'-Eである。また礎石間の距離はいずれも1.7mで、礎石上面のレベルはほぼ同じである。

第4期 中央平坦部の拡張はこの時期で終り、以後拡張は行われていない。北側平坦部と約25cmの段を成している。すなわち、北側平坦部(7×3m)と中央平坦部との比高差、距離は前期に比べて著しく縮まり、北側平坦部は中央平坦部の1部になっているとすべきかもしれない。南西平坦部は前期とほぼ同じであるが、全体を50cm~75cm盛上げている。なお、中央平坦部より約50cmの段差がある。前期に比べて著しく平坦部相互の関連性が増している。

## 第2郭

第1郭直下の南西側の郭である。第1郭との比高差8.3mを測る。6×7mのほぼ円形を呈し、第1郭との境に当る斜面に2mの幅で南北両側から溝状の地山整形をしている。

## 第3郭

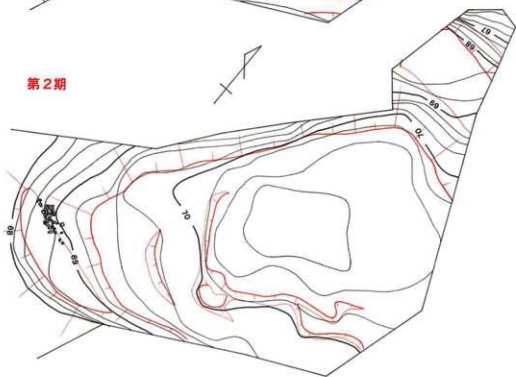
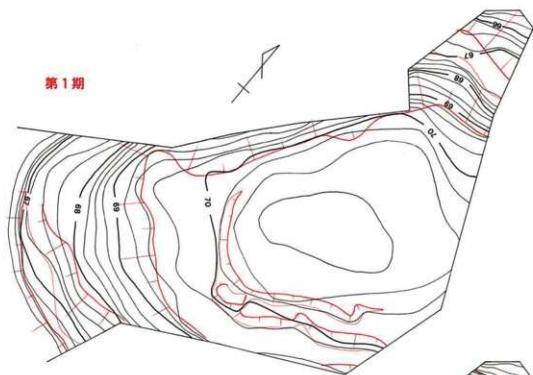
第2郭の南西側の郭で、第2郭とほぼ同じ高さをもつ。長軸21m、短軸5mの細長い隅丸方形を呈し、第2郭との間に北西・南東両側から幅3.5mの溝状整形を行っている。第2郭・第3郭の溝状整形は郭の境を明確にする役目をしているようで、規模も小さい。

## 第4郭

第3郭から南西に21m離れた郭で、第1郭との比高差12mを測る。長さ47m、幅6.5mの方形で両端は半円形に突き出す。この郭が最も南西に位置する。

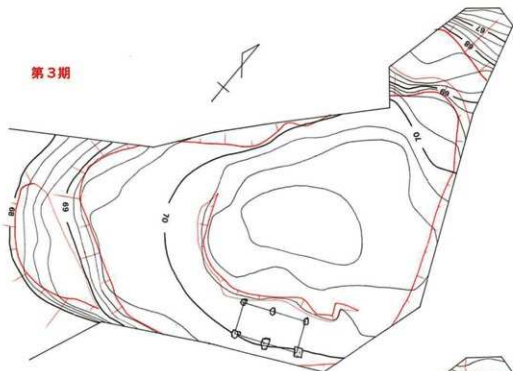
## 第5郭

第1郭の北側の郭で、第1郭との比高差16mを測る。13×6mの三日月形を呈し、この郭が最も低い郭に当る。

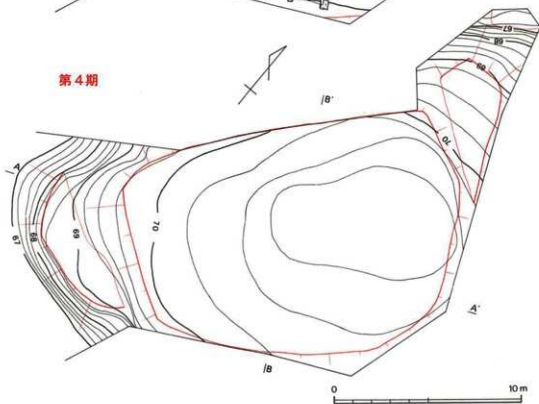


第5図 第1郭・郭変遷図(その1) S=1:200

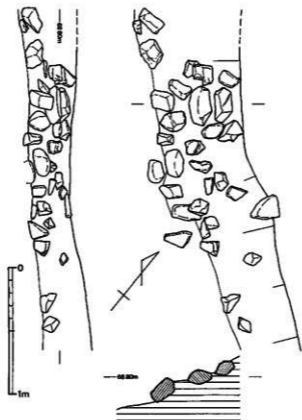
第3期



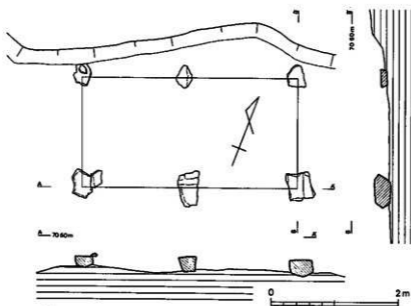
第4期



第6図 第1郭・郭変遷図(その2) S=1:200



第7圖 石垣実測圖 S=1:30



第8圖 礎石建物跡実測圖 S=1:60



### (3) 遺物

遺物はすべて第1期から出土している。第1期から第3期まで量的に通不足があるもの、主として中央平坦部の南半部・西側平坦部へつづく斜面から炭化物が密に付着した状態で出土した。遺物の遺存状況はきわめて悪く、とりわけ土師質土器はかなり磨滅している。出土遺物の内訳は、土師質土器（土鍋・皿）、陶磁器類（天目茶碗・備前焼壺）、土製品として土甕、鉄製品・銅製品として鉄釘・古銭・銅製飾金具、石製品として砥石であった。この他に炭化物がある。

#### a. 土器・陶磁器・土製品類（第9図・第10図）

土器・陶磁器類は第1期に伴うもの（1・5・13）、第2期に伴うもの（2・4・6・10）、第3期に伴うもの（11・12）がある。この他に青磁小片・赤生土器片各1点がある。

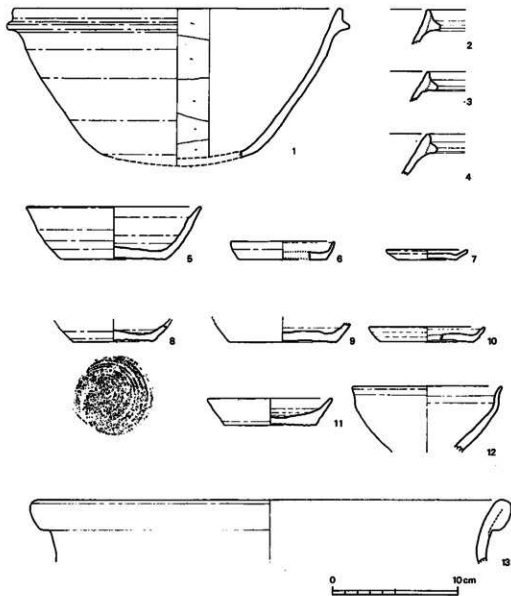
#### 土師質土器（第9図1～10）

1～4は土鍋片である。1は口径内法254mm、器高126mm（復元推定による）を測る。口縁から約10mm下がって7mmの幅で厚さ7mmの断面コの字状の凸帯を貼付け一連させる。体部と底部の境に線をもつ。外器面を縦方向のハケ目、内器面を横方向のハケ目で整形している。2から4はいずれも口縁部片で凸帯断面形はコの字状を呈する。また煤はこの凸帯の直下まで付着しており、本城跡の土鍋にいずれも通有的である。

5～11はいずれも皿である。色調は赤褐色～淡黄褐色を呈し、胎土は概して密である。また焼成は比較的良好的なものとやや甘めのものに分けることができる。ロタロの回転方向が右回りのもの（6・8～11）と左回りのもの（5・7）がある。また通期的な変遷は余り明らかに出来なかった。5は口径80mm、器高40mmを測る。底部と体部の接する部分で一度深くなり内面中央部に近づくにつれて盛上る。口縁部はわずかに外反し、端部を丸くおさめる。底部糸切りによると思われるが、かなり磨滅しているためわずかな痕跡を留めているにすぎない。6は口径80mm、器高14mmを測る。底部と胴部の厚さの相異が著しいもので、内面にはススが密に付着している。口縁部は若干内湾気味に開き端部を丸くおさめる。7は口径64mm、器高6mmを測る。底部はわずかに内に窪み、口縁部はラップ状に開き端部を丸くおさめる。8は5と同じように口縁部の立上りに当る部分が内面中央部より底くなるもの（9も同じ）である。口径・器高とも不明だが、底部の糸切り痕が鮮やかに残っている。10は口径90mm、器高15mmを測る。口縁部はラップ状に開き端部を丸くおさめる。11は口径96mm、器高21mmを測る。外面に煤が付着している。他の皿に顕著であった底部と体部の段形成は見られず、緩やかな弧を描いて開く。端部は丸い。以上のようにかなりのバラエティが存在するが、器の容量の少ないもの（6・7・10）と比較的多いもの（5・8・9・11）に分類できる。これは用途の差の反映であろう。

#### 陶磁器類（第9図11・12）

天目茶碗（12）は口径118mmを測る。口縁部は緩慢なS字状のカーブをして外口し、端部は丸くおさめる。体部外面の列・内面見込み部分まで襷輪がおよぶ。

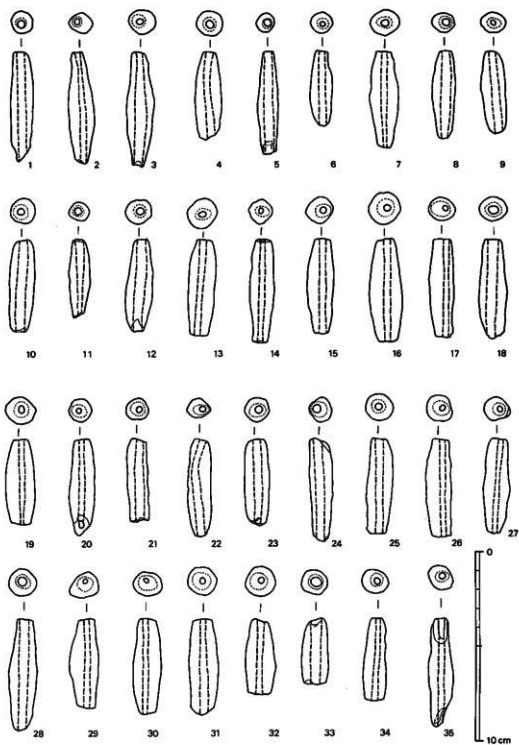


第9図 出土土器・陶磁器実測図 S=1:3

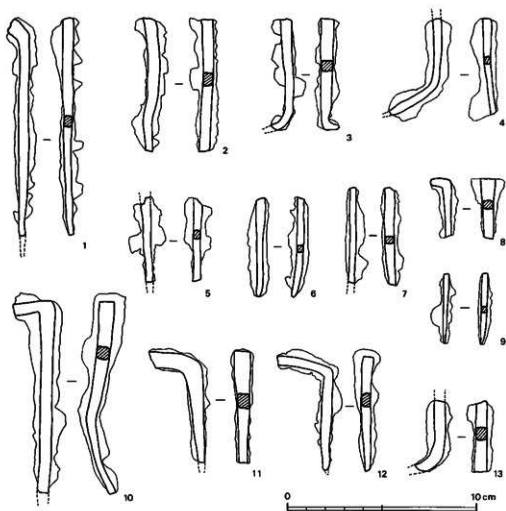
備前焼壺 (13) は口縁部片で口径344mmを測る。口縁部は端部を180°外側に折曲げて、玉縁を作出している。淡い茶褐色の釉が全面に及ぶ。

土甕 (第10図・1~35)

第2期に伴うもの(1~24)・第3期に伴うもの(25~33)・試掘溝から出土したもの(34・35)がある。土甕の総数は破損したのもも含めると40本になる。いずれも土管状を呈し、穿



第10圖 出土土器實測圖 S=1:2



第11図 出土鉄釘実測図 S=1:2

孔も片方からのものがほとんどで、僅かに3・22の2点が両側からの可能性がある。色調は淡黄褐色～赤褐色を呈し、焼成は概して良い。長さは40～60mm、50mm前後のものが多い。次に厚さは10～15mm、12mm前後のものが多い。穿孔径は3～7mm、5mm前後のものが多い。形態的屬性からの細分は困難であった。したがって大きさ等に若干バラツキはあるものいずれも淡水魚網漁用の錘と考えられる。

**b. 鉄製品・銅製品**

**鉄釘 (第11図・1～13)**

第2期に伴うもの(1～9)、第3期に伴うもの(10～13)がある。いずれも錆化が著しく、



第12図 古銭拓影 1:1

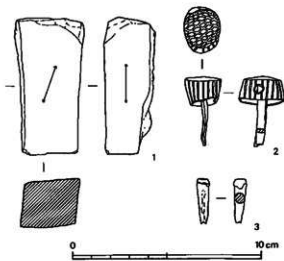
全体の形状を止めるものはなかった。また使用状況に関する木質等の痕跡もない。折願型で、断面形は正方形または長方形を呈する。先端部はやや尖り気味である。形態から二分ができる。推定全長が130mm前後になるもの(1~3・10・13)と推定全長が前者のほぼ半にあたる70mm前後のもの(4~9・11・12)がある。これは、鉄釘の用途による選択的な使い分けによるものであろう。

#### 古銭 (第12図)

2点出土した。いずれも第1期に伴うものである。遺存状況が良好で判読できたものに元祐通寶(初鈔元祐元年・1086年・北宋)がある。

#### 金具類 (第13図2・3)

2・3はいずれも銅製品である。2は第3期に伴うものである。縁部が若干窪んでいる。頂部は7条の沈線を対称的に施し菱形文様を描いており、頂部から垂直に折返した側面部には縦走る沈線を4mmの間隔でめぐらし、この一部に径5mmの小穴を向い合わせに穿けている。頂部の裏面中央部から二股に分かれる茎



第13図 石製品・金具類実測図 S=1:2

を付ける。このような精緻な装飾性からみて、飾金具の一種であろう。3は長さ14mm、直径5mmを測る用途不明の金具である。

#### e. 石製品 (第13図1)

砥石(1)がある。これは1郭の南東部からの出土遺物である。三面を丹念に研磨し、自然面を一面残す。長さ71mm、幅32mm、厚さ25mmを測る。花崗岩系の石材である。

以上の出土遺物のうち弥生土器を除いて土器類はすべて中世のものであり、本城跡で使用されたものとしてよいであろう。他の遺物も各時期に伴うものと判断されることから、本城跡の築城使用年代は城跡の構成・遺構・遺物等から一応室町時代の後半と推定することができる。

## Ⅳ ま と め

横山城跡の歴史的な位置づけや山城のあり方については、今後の調査研究によらねばならないことも多いが、調査の成果に若干の検討を記してまとめとした。

横山城跡は、三篠川に面した比高28～35mの独立丘陵を呈する地形を利用して築いた山城で、総計5段の郭からなる。丘陵の高所に本丸に相当する第1郭を設け、ここから南西に延びる丘陵上に第1郭から一段下って第2郭を設けている。この郭からさらに一段下って第3郭があり、第2郭との間には浅い堀を設けている。第3郭から南西には地山の尾根が延び、南西端付近は若干削平して第4郭の平坦地を作っている。第5郭は第1郭の背後及び西方側面を守るように設けた郭である。第1郭を除く各郭はいずれも人工的な削平を行っているが、いずれも平坦面は狭く、石垣や建物跡の形跡もなく、出土遺物もない。これらのことは第1郭の重要性を暗示しているように思われ、本城跡の性格やあり方を示唆している。

第1郭は地山を削平して3段の平坦地を設けた後に、少なくとも3回にわたって盛土を行ない、下段の平坦地を埋めて最上段の郭を拡張しているほか、この第1郭には西南斜面に貼り付いたように構築した角礫による小規模な石垣と1間×2間の礎石を有する建物跡がある。この建物跡は最高所に位置するのではなく、三篠川と北流してきた小河原川が合流してやや広い沖積地となる眼下を臨んで下段の平坦地に設けており、望楼的な施設と推定される。

出土遺物には土師質土器の土鍋と皿、天目茶碗、土鍾、鉄釘、古銭、筒金具、磁石などが出土したが、なかでも土師質土器、土鍾、磁石など日常用具類は他の山城の調査でもよく出土している。本城跡では前述のように第1郭は少なくとも3回にわたる修築が行われ、これら日常用具の出土からみてもかなりの期間使用した城であることが窺われた。なお、本城跡の年代は、これらの出土遺物からみて室町時代後半頃と推定される。ところで、このような第1郭のあり方と他の郭の規模及び削平状態からすると、第1郭以外の郭は城の機能としては付属的な役割をはたす程度であったと推定される。しかも丘陵斜面は急峻ではあるが、第1郭そのものも郭としては小規模であり、少人数しか入ることができなかったと想像するのに難しくない。すなわち各郭の規模や状態からすると、本城跡のみで攻守に対応したとは考え難く、近傍の城との関係において機能したと考えられよう。

本城跡の近傍に所在する城跡については、位置と環境の項ですでに概観したように、本城跡にもっとも近い城跡として、本城跡の北に谷状地形を挟んで七曲城跡が存在している。この城跡は本城跡と共に城主が不明であるが、城の立地や郭の配置状態、石垣の存在など室町時代後期の特徴をよく備えている。指呼の間にあるこの七曲城跡の存在は、横山城跡の立地や城跡のあり方や時期を考えると全く無関係とは考え難く、直接何らかの関係を有していたと考えるのが妥当であろう。

七曲城跡と横山城跡との関係に類似の城跡としては、牛尾遠江守幸清が天文10年(1541)ま

で居た中深川の院内城跡がある。また下深川の井尻氏が居た亀崎城跡は昭和51年の発掘調査によって明らかになった郭群のほか、丘陵先端の亀崎神社のある平坦地も郭であった可能性があり、三篠川と太田川が合流する地点をやや下った佐東町八木の香川氏が居た八木城跡も、別の郭群が本丸から100m以上離れた丘陵上に存在している。このほか、市内には武田氏の一族である伴氏が居た安佐南区沼田町の伴城跡と伴支城跡、熊谷氏の居た安佐北区可部町の伊勢ヶ坪城跡と左近城跡、城主は不明であるが安芸区瀬野川町の伊屋城跡と伊屋支城跡などがある。これらの城跡のあり方からすると、七曲城跡と横山城跡との関係は本城と支城又は出丸の関係にあるといえよう。すなわち横山城跡は、背後の七曲城跡の防備のために前面に位置する独立丘陵を呈する地形を利用して郭を設け、前哨的な役割を持たせるために築城されたと推定されよう。

さて、七曲城跡と横山城跡には一部に石垣を築いているが、この石垣は安土桃山期のように比較的大きな石を用いた石積でなく、郭の平坦面の拡張により盛土部分の崩落を防ぐためのもので部分的に積上げている。このようなあり方は狭い丘陵尾根にあって郭の平坦地を拡張するという必然性から生じたとみられ、大永～天文年間頃の築城ないし利用と伝えられる城に見られる。城はこの頃から一般的には各部の規模が次第に大きくなり、城の縄張も丘陵尾根上に次第に拡張されていくことが知られているが、横山城跡の第1郭のあり方や、七曲城跡とのあり方を考慮すると、まさにこの時期の城跡として位置づけられよう。

ところで三篠川下流域における室町時代後半から戦国期にかけての全般的な情勢は、出雲の尼子氏、山口の大内氏の二大勢力による進出と、安佐北区祇園町の銀山城に拠る武田氏、吉田の郡山城に拠る毛利氏の勢力争いが中心となっている。七曲城跡と横山城跡は前述のように城のあり方や出土遺物からみて、大永～天文頃の城と推定される。この時期の出来事として大永5～7年頃に大内義興は毛利元就に深川上下200貫、深川の南に位置する温品に300貫のほか久村70貫、可部700貫を与えている。〔『毛利家文書』215号〕しかし、実際には、尼子氏や武田氏の勢力下に属していた中深川の院内城には牛尾氏がいるほか、亀崎城には井尻氏、地蔵堂山城には久村氏など在地土豪がいて知行することは不可能であり、これらの地が実際に毛利氏の勢力下に入るのは天文10年（1542）に武田信実の居る銀山城の陥落によってである。

七曲城跡及び横山城跡の城主については伝承がなく、その手がかりを欠くが、三篠川下流域の当時の在地土豪のなかで牛尾氏の動向は注目される。上深川の東に隣接する狩留家の薬師堂は、享徳2年（1453）に牛尾範郷の建立と元亀2年（1571）に牛尾右京佐の再建を伝えている。また中深川の院内城には天文10年まで牛尾遠江守幸清が居ることから、牛尾氏は上深川を中心として狩留家から中深川の一帯に勢力を持っていたことが知られるが、勢力の中心にある七曲城の存在は、牛尾氏と無関係に存在していたとは考え難く、牛尾氏とのかかわりを強く持っているとは推定してよいであろう。



横山城跡全景





a. 横山城跡調査前遠景



b. 同上調査後遠景



a. 横山城跡 第1郭・第2郭・第3郭・第5郭 近景



b. 同上 第1郭より南西尾根上の郭を望む



a. 横山城跡 第1郭 石垣



b. 同上 礎石建物跡



a. 横山城跡第1郭断面



b. 同上 第4郭を望む



a. 横山城跡 第2郭 完掘状況



b. 同上 第2郭・第3郭 調査風景



a. 横山城跡 第2郭・第3郭 鞍部



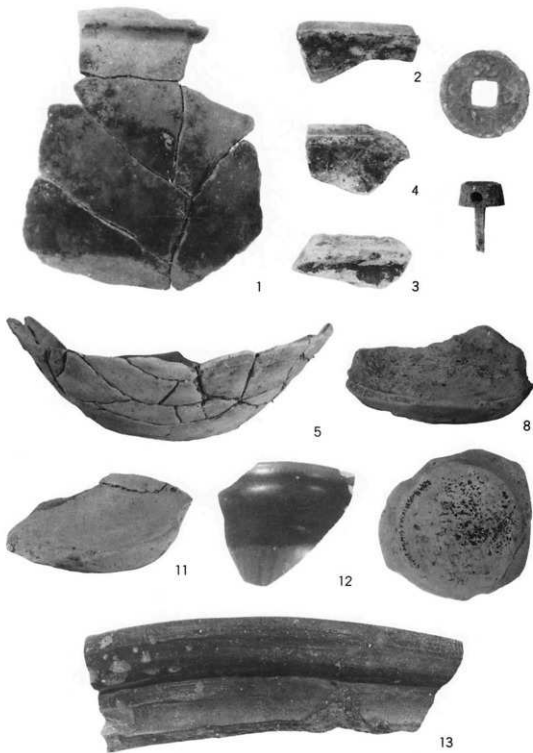
b. 同上 第3郭 完掘状況



a. 横山城跡 第4郭完掘状況

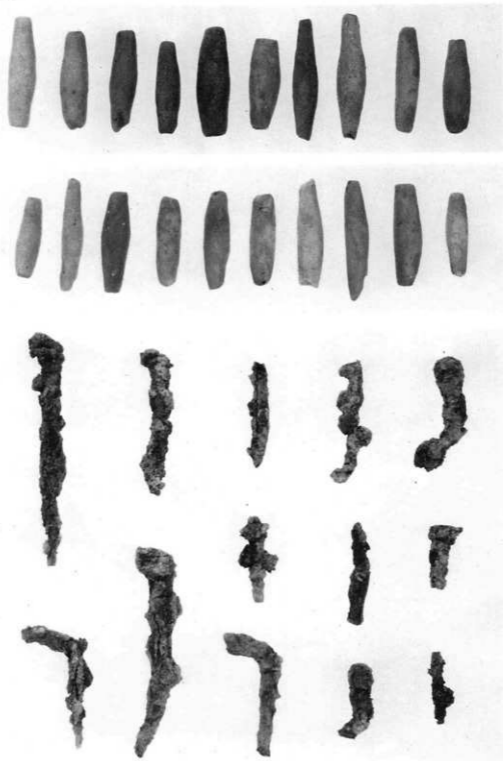


b. 同上 第5郭完掘状況



横山城跡出土遺物(その1)





横山城跡出土遺物(その2)

# 横山城跡発掘調査報告

1984 (昭和59) 年 3 月

編集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター  
発行  
印刷 株式会社 中本本店印刷